

麦作

「北海道 麦作りに挑む人々」その2

二海郡八雲町熊石 宍戸 ^{すぐる}英氏

1 はじめに

宍戸氏（35才）が住む渡島総合振興局（旧檜山振興局 平成17年（以下 平成を省く）八雲町と合併）の秋まき小麦（以下小麦）反収は、主な振興局の7中5平均で上位から5番目にあるが、檜山振興局では下位から3番目に位置している（図1）。

栽培環境は、檜山振興局管内にあり、反収で苦戦を強いられている地域となる。その中で、宍戸氏の26年産小麦反収は、JA新はこだて厚沢部基幹支店の中でトップの反収であった。宍戸氏の小麦栽培の特徴などを探ったので紹介する。（写真1）

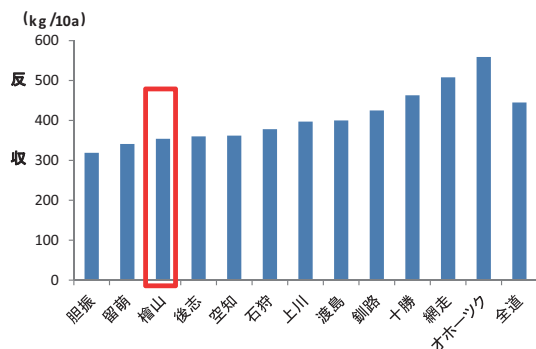


図1 主な振興局の反収

(19~25年の最高、最低を除いた5年平均)



写真1 宍戸さん家族

2 地域の特徴および経営概要

(1) 八雲町熊石の気象および土壌条件

小麦栽培における気象面でのプラス要因は、日本海側の暖流に恵まれ11月後半まで生育が可能で、越冬前の生育が確保されやすいこと。また、積雪期間が短く雪腐病や冬損が少なく、起生期の茎数が確保されやすいというメリットがある。

一方、マイナス要因は、6~7月の登熟期間中の降水量が帯広より40%、網走より77%それぞれ多く、また、平均気温では、帯広より1℃、網走より2.7℃それぞれ高い。

このことから、登熟日数が十分確保されにくく、粒の充実に悪影響を及ぼすことが考えられる（図2、3）。

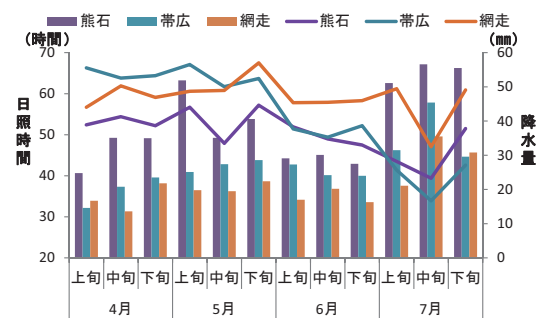


図2 3地区の日照時間と降水量の比較

(アメダス1981~2010年の平均)

(折れ線~日照時間、棒グラフ~降水量)

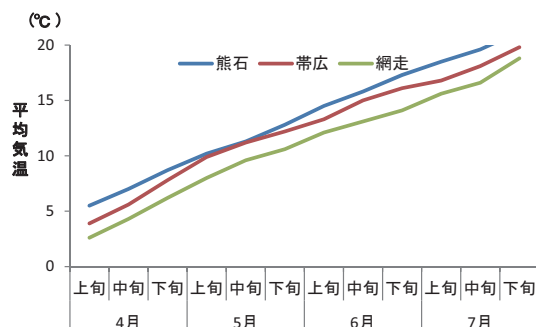


図3 3地区の平均気温の比較

(アメダス1981~2010年の平均)

表1 作付割合 (26年)

主要作目名	作付面積 (ha)	作付割合 (%)
水 稲	8	15
秋まき小麦	8	15
大 豆	15	29
てんさい	7	13
小 豆	8	15
ばれいしょ	5	10
山ごぼう	1	2
合 計	52	100



写真2 昨年開墾した圃場

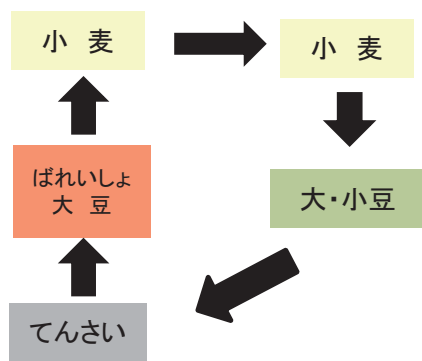


図4 輪作体系



写真3 抜根した木を防風林替わりに積み

土質は、平場地帯は褐色低地土で排水性は良い。高台地帯は、褐色森林土で排水にやや難がある。小麦の栽培は、平場地帯の水田転換畑と高台地帯とで栽培されている。

(2) 経営規模と作付構成

宍戸氏の経営面積は、52haである。内借地は約1/3となっている。栽培作物は、水稲、小麦(きたほなみ)、てんさい、ばれいしょ(メイクイン)、大豆、小豆、山ごぼうである。各作物の面積と輪作体系は、表1、図4のとおり。

3 小麦栽培の経過と特徴

(1) 輪作の状況

小麦の前作は、主にばれいしょで一部、大豆間作小麦栽培も行っている。

昨年、約10haの原野を町から払い下げて開墾した。この圃場に今春から全面的に大豆を栽培することから、28年産小麦は、大豆間作小麦として播種する予定である。

(写真2、3)

(2) 収量・品質

小麦栽培の歴史は、17年からと比較的浅い。導入のきっかけは、主に圃場への有機物対策であった。近隣に畜産農家はおらず、堆きゅう肥の入手は困難であった。また、スイートコーンなどのいわゆるカラものの栽培もなく、畑の有機物不足の危機感から小麦を導入することとなった。

しかし、小麦栽培の経験は父親もなく、英氏が栽培を全面的に任された。ほとんど手探り状態だったが、普及センターや先進農家から学びながら今日に至っている。

3ヵ年平均の反収は518kg/10aで、町平均(近隣の厚沢部町)の約1.5倍と高い。また、1等麦比率は約80%。26年産の小麦品質評価項目では、Aランクであった。

図5、表2

表2 宍戸氏の小麦品質 (26年産)

容積重(g/ℓ)	F.N. (sec)	蛋白含量(%)	灰分含量(%)
870	412	11.2	1.39

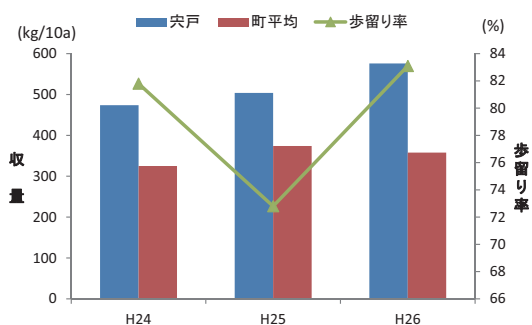


図5 宍戸氏と近隣（厚沢部町）との収推移



写真4 実証圃の莖数を数える

4 技術の特徴

(1) 失敗から学ぶ

～そのためには、まず莖数を数える～

23年産の小麦は、7月始め日本海側の強風にあおられ全面倒伏だった。朝起きて、小麦畑に行きたくない日がしばらく続き、つらかったと言う。その時の穂数は845本/m²と多く、残念ながら検査等級は全量規格外となった。精神的にも経済的にも大きなダメージを受けた年であった。

とにかく倒伏させたら「元も子もない」ということをいやと言うほど実感させられ、莖数や穂数を数えて播種量や追肥量をコントロールし、この地域の適正な莖数や施肥量を把握するしかないとの結論に至った。(表3)

最終的な穂数の目標は、800本/m²以内。安全性を見込んで600本/m²との見解もあるが、この地域では少々物足りなさを感じる。

27年産の秋まき小麦圃場では、普及センターと協力して播種量の実証圃を設置している(写真4)。実証圃の内容は、10a 当り5.2

kgの慣行区と播種量を増やした5.4kg区、6.9kg区、8.2kg区の4区である。リスクを背負いながらも自分の目で確かめながら、適正な播種量を探っている。

(2) 播種量は少なめに

24年産からの播種量は3.5kg/10a、25年産4.9kg/10a、26年産5.1kg/10aとした。

近隣町村の播種量に比べ少なめであるが、秋が長いことと起生期が早いことを考え合わせると、現在の播種量で十分だと考えている。

また、播種時期も重要で、全面倒伏した23年産の播種日は9月16日であった。越冬前には過繁茂となり、起生期には1,300本/m²と多かった。

このことも倒伏を助長したと思われ、翌年の播種からは9月27日以降に播種日を設定した。

ちなみにアメダスによる(厚沢部町鶏普及センター調べ)積算気温では、本葉5葉を確保するためには9月29日の播種日(461℃)で良いことが示されている。

表3 耕種概要など (26年産)

は 種 (kg/10a)			土性	施 肥 (kg/10a)					根雪始	雪腐病防除	
期	量	方法		区分	窒素	リン酸	加里	月日		時期	使用薬剤名
9月29日	5.1	ドリル播き	砂壤土	基肥	4	15	7.5	9月29日	H25.12.10	-	-
				追肥							
				起生	9.2			4月2日			
				幼形	4.6			4月30日			
				止葉	4.6			5月26日			

(3) とにかく倒伏させない

23年産の全面倒伏の経験から、倒伏させないためには莖数を数え、播種量と追肥量をコントロールすることを学んだ。そして、莖葉の状態（葉色・莖の固さ）を見ながら生育調整剤（エスレル10）も利用している。これらの技術を駆使したこともあり、幸い平成24年産以降の小麦に倒伏はない。

(4) 土壌改良材の利用

酸性矯正とミネラルの補給のため、土壌改良材を全圃場に毎年200kg/10aを施用している。「切なくなってから入れる」のではなく、ある程度余裕をもって計画的に入れていく。特に、新しい借地等の圃場には通常の2倍位を入れている。確かに、他所の土地に土壌改良材を入れることに抵抗はあるが、そこは割り切っている。そうでないと、良いものが取れないからだ。

(5) 情報はオープンに ～情報の共有化～

檜山の小麦を高品質で安定的に生産するには、多少のリスクを背負ってでも試験圃場を設定して進めたいと思っている。その中から得た情報は、求められればためらわずに公開している。情報を発信することで、全道にいる小麦生産者の仲間と繋がって、いろいろ教えてもらう関係も作れるからだ。

父親から小遣いをもらいながら全道各地で行われる研修会に参加することは、少々気が引けるが、その分自分の経営にキッチリ返すことができれば無駄ではないと思っている。

5 今後の課題

(1) 小麦乾燥調製の整備

水稲用の縦型乾燥機はあるものの、掃除の煩雑さとコンタミ防止のため小麦には使用していない。そのため、自家の汎用型コンバインで収穫した小麦は、自宅から40km程離れた親戚の乾燥機に運び乾燥・調製している。

しかし、時間のロスと小麦の増反に伴い80石前後の縦型乾燥機3基の導入を経産省関連

予算に申請中である。この予算が通れば、乾燥機を収容する建物の新設も予定している。これらの整備で、収穫・乾燥調製がよりスムーズとなり、より安定した小麦生産が期待できる。

(2) 汎用コンバインの導入の検討

前述したように、熊石は収穫時期に降雨が多いことから収穫・乾燥への十分な備えが重要となる。前述したとおり、増反に伴う収穫量が増えることもあり、現有コンバインを予備にして新しく導入できればベストと考えている。

加えて、現有コンバインは購入から17年も経過し、すでに耐用年数が過ぎていることもあり、故障などのトラブルに備える必要がある。

できれば、どんな年でも収穫を3日間で完了できる収穫体系を目指しながら、よりタイムリーな収穫作業を可能にして、歩留まり率の向上を図りたいと考えている。

6 おわりに

これからの農業経営（規模拡大も含めて）を考えると、畑作物の中で小麦は中心作物となる。食用のばれいしょは、収穫・選別に手間がかかり、そのためデメンさんに頼らざるを得ない。

しかし、デメンさんの高齢化と他産業からの需要が多く、引っぱりだこの状態である。

また、てんさいについても育苗に時間を要し、苗運びなど家族労働の負担が大きい。今後、食用のばれいしょを徐々に減らしながら、同時に直幡てんさいの導入にもチャレンジしたいと考えている。

中学一年を筆頭に、3人の男の子がいるので、強制はしないが、その内の誰かが跡継ぎとなっても困らぬように、しっかり基盤を作りたいとのことである。

宍戸さんの家族は、農業の楽しさや魅力を普段の生活の中で共有しているとの印象を強く感じた。「子は親の背中を見て育つ」と言

われるので、きっと三人の息子の誰かが後継ぎになるに違いないと感じた。

<宍戸氏のコメント>

現在、JA新はこだて厚沢部基幹支店の小麦部会長を担っている。26年産の小麦反収は、厚沢部基幹支店の中でトップであった。しかし、今年はどうなるかが大きなプレシャーとなっている。

毎年、コンスタントに取れるよう普及センターやJAと協力しながら、また、各地の先進農家に学びながら、この地域の特徴を活かした小麦栽培をしていきたい。(写真5)



写真5 八雲町熊石折戸地区